

特集 CRC をめぐって

『がん臨床試験のプレイクスルー：まず基盤から 第1回 CRCの明日を考える』セミナー記録

【CRC支援の立場から明日を考える】

座長から：支援を受けてCRCとして何をを目指すか

国立研究開発法人国立がん研究センター東病院臨床研究コーディネーター室

原 真 幸

静岡県立静岡がんセンター治験管理室

柳 澤 由 紀

「第1回CRCの明日を考える」の後半では、「CRC支援の立場から明日を考える」というテーマで3名にご講演いただいた。各講演内容を、私感を含め紹介する。

CRCの雇用と離職の現状

株式会社EP総合・田代伸郎氏にご講演いただいた。院内CRCとして勤務する筆者には、貴重な機会であった。

院内CRCの教育プログラムのほとんどは各施設で作成している。入職者の医療資格、CRC経験、業務の理解度・達成度により、適宜評価を行いながら、CRCを育てている。日本SMO協会(JASMO)のデータが示されたが、ここ数年CRCの数は横ばい、公認CRC数は減少、2015年度では公認CRC合格者数より退職者のほうが多いという厳しい現状を知った。CRCの離職率が高止まりしていて、CRC離職防止と若手育成は治験業界の課題とのことだったが、この点はSMOも院内CRCも共通かもしれない。

CRCのキャリアパス

CRCあり方会議やCRC養成研修などで、一度は講演を聞いたことがあるはずである。演者は、静岡県立静岡がんセンターでCRCとして長年勤務した後、MSD株式会社に現在活躍している齋藤裕子氏である。

院内CRCとしての勤務中、病院内の体制整備や後輩の育成を積極的に行い、自分のキャリアパスを自分で考

え、さまざまなビジョンをもって企業へ転職した経験を披露され、「CRCは団体であり、組織になっていないことを感じる」という言葉が印象に残った。看護部に所属して病棟勤務の経験がある筆者も、CRCは組織管理がされていないと感じることが時折あり、今後の課題だと思っている。

看護の中でのCRC/リサーチナースの立場

聖路加国際大学の特任教授である井部俊子氏は、新GCP成立時に体制整備と特定の役割をもった職種の必要性から、リサーチナースとはしなかったとのことである。職名がリサーチナースとされていた際には、薬剤師・臨床検査技師などがCRCとなり、この業界で「リサーチナース」と「CRC」の2つの職名ができる可能性があったなど、いろいろと思いを巡らせた。良いキャリアを歩むとはどういうことかを考えるヒントとなったが、CRCとして働く私たちが自分たちの手でキャリアパスを構築しなければならないという課題をもらった気がした。

CRCは日々の業務に追われ多忙な毎日を送っている。瞬間に月日が過ぎていて、あぜんとすることも多々ある。しかし、今回の参加者数を見て、これだけのCRCが各施設で頑張っていることも知ることができた。「これから、CRCとして何を目指していくのか」を各自、考えたい。